

5. 校内研究計画

(1) 研究主題・副題

「協働的に問題を解決する子の育成」 ～子ども主体の授業を通して～

(2) 研究主題及び副題設定の理由

本校では、学校教育目標の達成のため、令和5年度より研究主題を「協働的に問題を解決する子の育成」として、国語科と算数科を中心に研究を進めてきた。また、昨年度からは、子ども主体の授業づくりに取り組んできた。

昨年度の成果として、単元や毎時間のゴールを具体的に提示することで、児童らは見通しを持ち、主体的に学ぶ姿が見られた。また、様々な学び方（道具、場所、交流相手、方法など）を体験した上で、自分で選択させたり、選択したものについて振り返ったりさせていくことで、児童が自分の学びに向き合い、より良い学び方を考え、取り組む姿につながった。しかし、まだまだ学習に受け身で取り組む児童も多く、分からないことがあってもどうすればよいか分からずに動けずにいる様子も見られる。また、教師自身の授業づくりへの意識も「児童がどのように学ぶのか」、「児童が資質能力を身につけるために、教師はどうサポートするのか」に重きを置き、児童を「自立した学習者」として育てる必要がある。

そこで、今年度は、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に向けた授業づくりを更に追究し、各教科で身に付けさせたい資質能力を明確にした上で、それを軸とした単元・授業構成を工夫する。児童が自力解決していけるような学習環境づくりや、児童が主体的に学ぶ姿や児童の情報活用能力の育成を追究していくことで、「協働的に問題を解決する子の育成」を目指し、研究を推進していきたい。

(3) 研究の重点

学びのサイクルを意識した「子ども主体」の授業づくり

児童が主体的に学ぶためには、自分で見つけた問いを解決するために、情報を集める、集めた情報を整理・分析する、そして問いに対する自分の考えをまとめ・表現し、それらの学習過程を振り返ることで新たな問いを見いだしていく、といった、学びのサイクルを児童自らが回していくことが必要だと考える。そこで、そういった学びのサイクルを児童と共有しながら実現していけるよう具体的な手立てを講じ、児童が自らの学び方を選択・判断・決定できるような複線型の授業設計などに取り組んでいく。教師は、児童が主体的に学ぶ中で身に付けさせたい資質・能力を育成できるよう、ねらいを焦点化し、ゴールの姿をより具体的に想定して指導にあたることを意識し、実践していく。

子ども主体の授業の中でねらいを達成できるよう、以下の2つの授業スタイルを往還させながら授業をデザインしていくこととする。

① 松小スタンダード学習（個別最適な学びと協働的な学びの往還がある複線型授業）

1 単位時間の中で、児童が問題解決に向けて、自ら最適な学習方法、学習形態を選択・判断・決定し、自力解決を図っていく学習スタイル

・学習課題や課題解決に必要な情報、活動については、導入場面で一斉に確認し、その後の

課題解決の過程では児童に委ねる。

- ・教師は端末等を活用しながら、児童の学習状況を見取り、全ての児童がその時間のねらいを達成することができるよう、適切な支援をしていく。
- ・考えの練り上げ、まとめは一斉で行い、適用問題や振り返りは再び児童に委ねる。

② 松小マイプラン学習（単元内自由進度学習）

1つの単元で、または2つの教科の単元を組み合わせ、児童自身が決められた時数の中で学習計画を立て、基本的に自分で学習を進めていくスタイル

- ・学習進度、学びの対象、学習方法、学習形態、学習場所を児童自らが選択・判断・決定していく。
- ・教師は児童の自立的な学びを支え、確実に資質・能力が身に付くように教材準備や環境整備を行う。
- ・松小マイプラン学習は、2学期に1回、3学期に1回実践する。

（４）学びを支える学習基盤づくり

①基礎基本の定着

- | | | | |
|---------|--------|----------|---------------|
| ・お話名人 | ・ノート名人 | ・話し方・聴き方 | ・国語辞典、漢字辞典の活用 |
| ・声のものさし | ・朝学習 | ・朝読書 | |

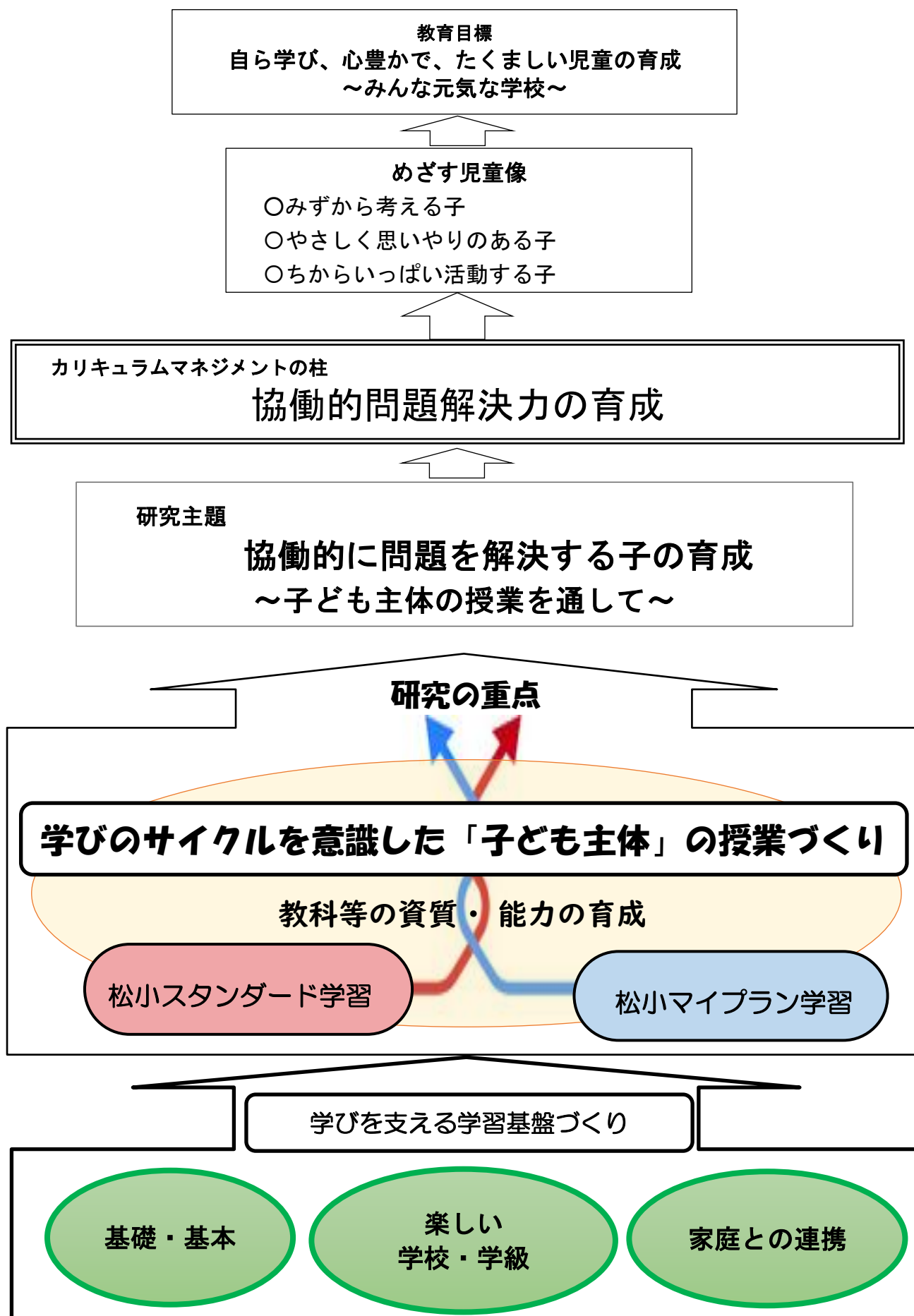
②楽しい学校・学級

- ・安心できる教室環境
- ・意図的なペア、グループワークの場の設定
- ・生徒指導の3機能＋1をいかした授業の中での生徒指導

③ 家庭との連携

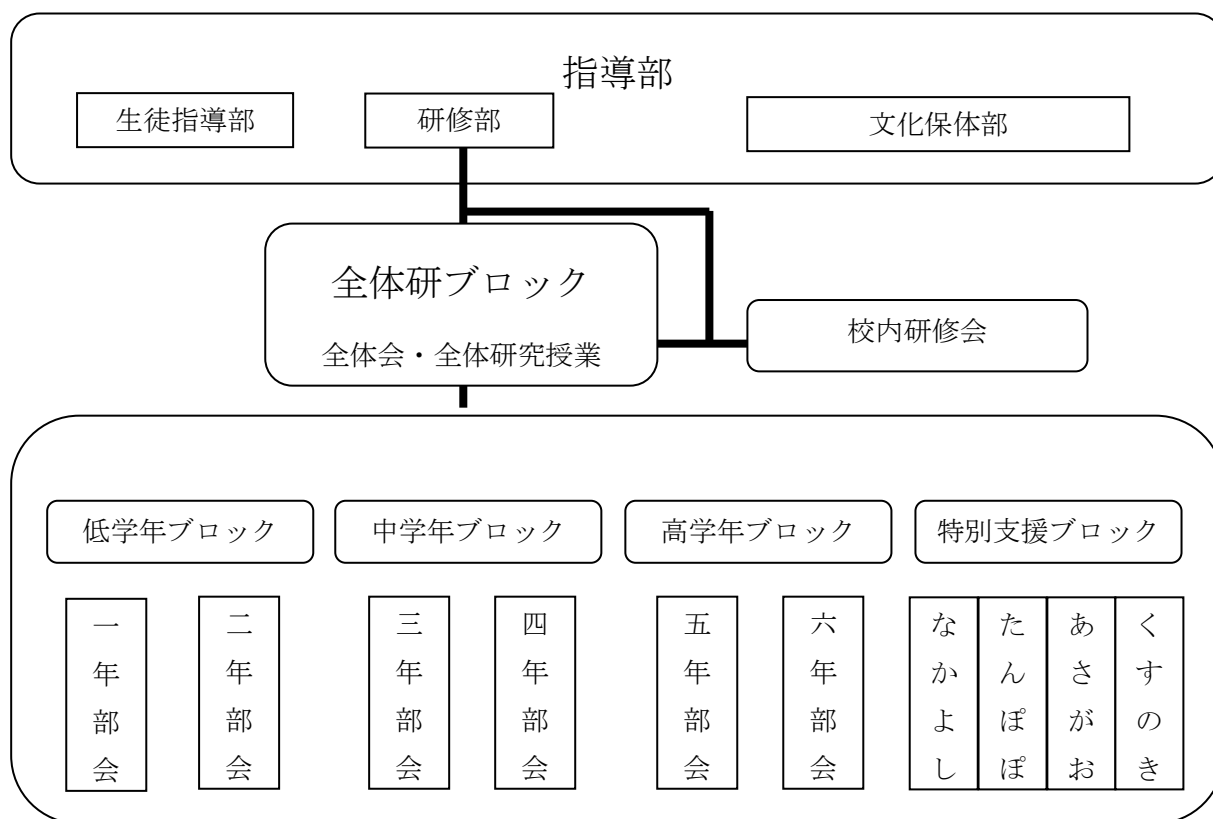
- ・基礎・基本の反復練習
- ・基礎・基本の活用
- ・自学ノートによる自発的な学び
- ・レッツゴーリズムカード
- ・家庭学習の手引き

(5) 研究構想図



（６）研究方法

①研究の組織について



②通常の授業について

国語科・算数科を中心に，授業スタイル「松小スタンダード学習の授業スタイル」に則して進める中で，

重点「学びのサイクルを意識した『子ども主体』の授業づくり」

のための具体的な手立てを位置づけて実践する。実践で効果的だった指導等については，教育課程に記載し，次年度以降，活用していけるようにする。

③研究授業について

ア) 回数・教科等

- ・ 全体研究授業（低学年１名，中学年１名，高学年１名）
- ・ ブロック研究授業（低学年１名，中学年１名，高学年１名，特支２名）
- ・ 学年研究授業（特別支援研究授業）

のいずれかに全員（再任用等の方は希望者のみとする）が年に１回取り組むこととする。級外を除き，全員が国語科または算数科の（できる限り学年で各１本以上となるように）研究授業を行う。全体研究授業は，助言者を要請し，研究の充実を図る機会とする。

イ) 事前研究会について

- ・ 全体研究授業の事前研究会は、全員で行う。
- ・ ブロック研究授業は、事前研究会をブロックで行う。
- ・ 学年研究授業、特別支援研究授業も事前研究会を行う。
- ・ 事前研究会で出た意見等は研修部が記録をとり、各研究会のファイルに保存しておく。

④参観等について

- ・ 2 日前までに授業者は指導案を職員の机上に配布し、終礼等で参観のポイント等を伝えておく。
- ・ 授業者がいる学年の研修部は、事後研究会で用いる付箋等を授業会場に用意しておく。
- ・ 全体研究授業、自分の所属するブロック研授業は全員が参観する。
- ・ 特別支援研究授業は、児童の実態に応じてビデオ研究や授業配信を行うことも可とする。
- ・ 研究授業の記録（授業記録や写真等）は、研究授業を行う学年やブロックで行う。

⑤事後研究会について

- ・ 全体研究授業・ブロック研授業の事後整理会は、グループに分かれて重点シートをもとに話し合い、全体交流会を行う。＊全員が意見を発言できるように工夫する。（バズトークなど）
- ・ 司会・準備は研修部で行う。
- ・ 全体研・ブロック研の記録は研修部、学年研は学年で行う。
- ・ 事後研究会では、重点の手立てが有効であったか、ねらいを達成できたかについて検討する。
- ・ 事後研究会の後、10 日以内に考察をまとめ、発行し、全員で次にいかす共通実践を確認し、進めていく。
- ・ 指導案と考察、事後研究会の記録は研修部の各ファイルにデータ及び紙媒体で保存しておく。

(7) 研究の評価について

①児童アンケート

- ・ 「友達と力を合わせたり友達の考えを取り入れたりして、学習や行事に取り組んでいる。」
- ・ 「自分から学習に取り組み、考えを深めている。」

の2項目でA評価に着目して、本研究が児童にとって効果的であったかどうか判断する。

②教師アンケート

- ・ 「私は、「子ども主体の授業」をしている。」
- ・ 「私は、児童が学び合いを通してねらいにせまることができるよう指導している。」

の2項目でA評価に着目して、本研究が児童にとって効果的であったかどうか判断する。

③学力調査や検証問題等

今年度実施する学力調査や検証問題等の結果をもとに、指導に反映していく。

(8) 研究計画

学期	月	全体研修会・ブロック研修会	松小マイプラン学習	学年研等
一学期	4	・職員会議 研究主題・副題・基本構想図等の提案と共通理解 年間研究計画の作成 学習の土台づくりの 共通理解 家庭学習の確認 ・校内研修 今年度の研究について		研究教科の決定 年間指導計画の作成 総合的な学習の時間 年間計画の作成 教材研究・研究推進 研究授業単元の決定
	5	・校内研修 指導案・考察形式の 共通理解 ・ブロック研 目指す児童像と 共通実践について		教材研究・研究推進 学年研究
	6	全体研授業 ブロック研授業	松小マイプラン学習引継ぎ会	学年研究 教材研究・研究推進 児童評価
	7	ブロック研授業 1学期実践の成果と課題考察		学年研究 教材研究・研究推進
二学期	8	1学期実践の検証・考察		教材研究・研究推進
	9	ブロック研授業		教材研究・研究推進
	10	全体研授業 ブロック研授業	第1回松小マイプラン学習	教材研究・研究推進
	11	ブロック研授業	↓	教材研究・研究推進
	12	2学期実践の成果と課題考察 2学期実践の検証・考察 研究紀要作成の提案		教材研究・研究推進 児童評価
三学期	1	全体研授業 ブロック研授業	第2回松小マイプラン学習	学年研究 教材研究・研究推進
	2	今年度の反省とまとめ 研究紀要の提示 次年度の方向性の提案・検討	↓	学年研究 教材研究・研究推進
	3	次年度の方向性の確認		

(9) 松小スタンダード学習の授業スタイル

☆この時間のねらいが知識・技能なのか思考・判断・表現なのかを明確にする

☆単元末に児童がどんな姿になっていけばよいのか具体的に設定する

☆児童のアウトプット量>教師のアウトプット量となるようにする

5 〜 7 分を目安に 課題提示まで	前時の振り返り ○数人の発表 ○ペアで交流	本時とのつながりがなければ不要 本時の課題意識を高めることに つながるのかという視点で判断
	問いを見つける ○問題を声に出して読む ○解決の見通しをもつ わかること・わからないこと　できそう・できない 既習が使えるか　これまでとの違い・ズレ	興味関心が高まる問題等の提示 方法の見通しと結果の見通しを 意識する
	課題設定<　　> ねらいに合わせた課題を設定 (Let's 課題ばかりにならないよう吟味する) 子どもの？をいかした課題にする	子どもの問いを大切にすが、 時間をかけすぎない テンポよく！

知識・技能

時間をかけすぎず！	○自力解決や数人での交流 →時間を区切る　短めでOK
	○全体交流 →説明は数人 キーワードで整理して板書する
	○まとめ →児童の言葉をいかす 「～するとできる」 「～を使うとよい」など
こころをかける！ 充実！	○練習問題等　【一斉で】 個人→説明→全体で確認
	◎適用問題　【個別最適化】 →個々の力に合わせ、どんどん解く できる子は発展的な問題に挑戦 教師は見取りと C→B への支援 ※全員が確実にできるようにする！

思考・判断・表現

こころをかける！ 充実！	○自力解決や数人での交流　【複線化】 →初めにもった見通しをいかし、数直線 図などの図、表、グラフ等のツールを 用いて考えさせる →端末に手掛かりとなるような情報を入 れておく →ヒントをもらいにいく交流もOK →答えを求めるだけでなく、なぜそう なるのかをアウトプットさせる ○全体交流　※問い返して深める！ →端末を活用し、取り上げたい考えを全 体共有 →考えを取り上げた児童に説明させる だけでなく、他児に説明させ、複数児 童の活用を場を →不十分な説明には教師が問い返し、児 童に説明させる　×教師の教え込み ○出てこなかった考えを教師が提示 →説明は児童に ◎深める 共通点と相違点の確認　関連付け 方法の確かめ　各考えの良さの確認 など
	○まとめ →児童の言葉をいかす ○適用問題 →考え方を問う問題にする ×知・技の問題にならないように ○振り返り

